

第 4 章

子どもへの期待と習い事

樋田 大二郎



第1節

子どもの将来

① どのような人になってほしいか

母親が子どもの将来に期待するのは何よりもまず心身の健康、思いやり、他人に迷惑をかけないなどの心身や人間関係の健康についてである。これに対して、一流大学を卒業すること、リーダーになること、社会奉仕、国際的に活躍することなどへの期待は低い。また、個性的な生き方を期待する割合もきわめて低い。経年比較では、6年前と比べて今の母親は「善悪をわきまえ、他人に迷惑をかけない人」になることへの期待が強まっている。そして反対に、意思をねばり強く主張したり、夢を持ち続けたり、誠実で責任感があることなどへの期待が低くなっている。

◆◆心身と人間関係の「健康」を期待

子どもが将来どのような人になってほしいかをたずねたところ、図4-1のような結果が得られた。

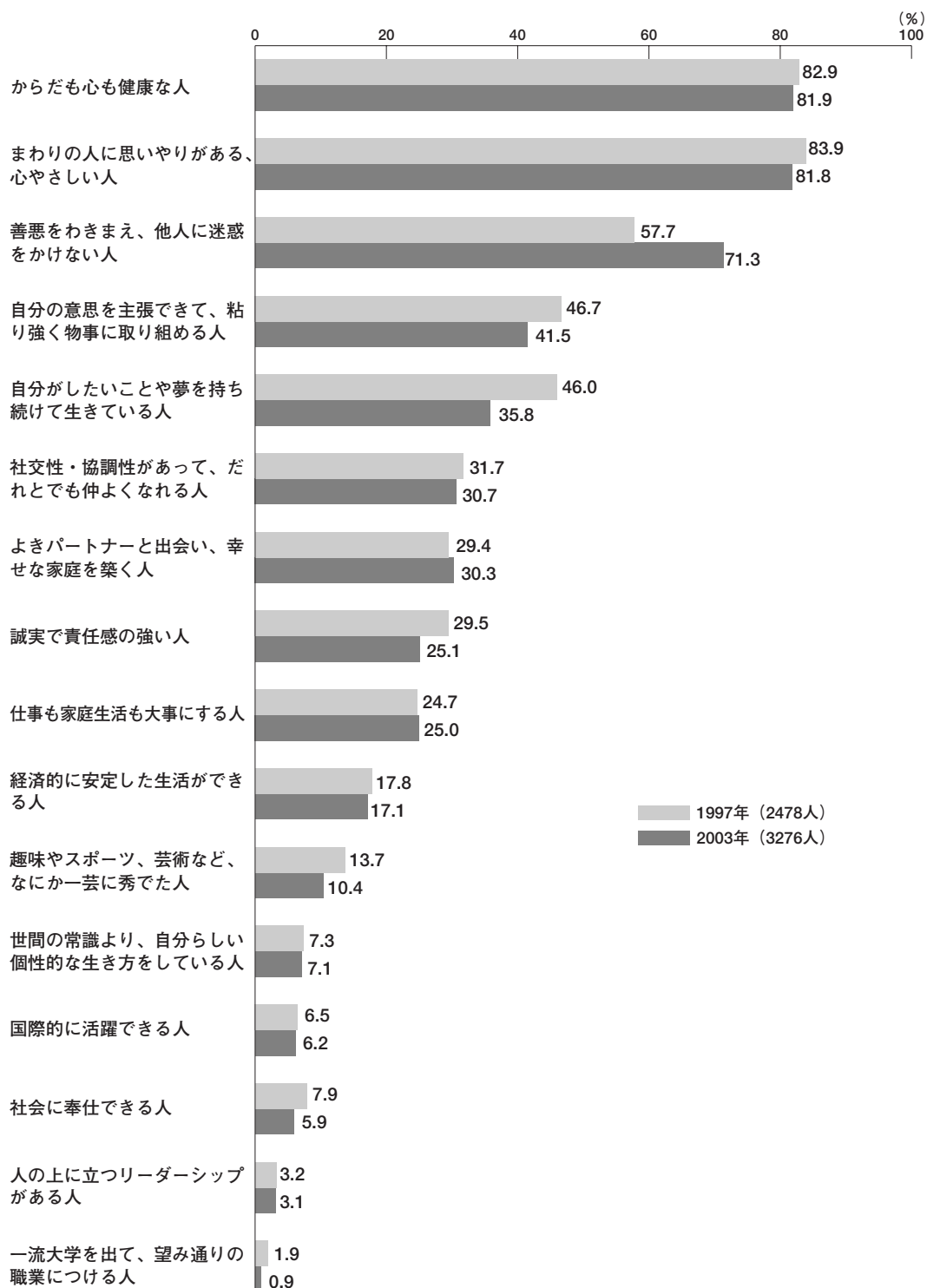
まず、2003年調査についてみると、母親が子どもの将来に期待する将来像のベスト3は、第1位が「からだも心も健康な人」の81.9%、第2位が「まわりの人に思いやりがある、心やさしい人」の81.8%、第3位が「善悪をわきまえ、他人に迷惑をかけない人」の71.3%であった。この質問では、とくに大切だと思うことを5つまで選んでもらっているが、上記の心身や人間関係の健康に関する3項目に期待が集中し、これら以外は期待する項目が分散してしまい、4割程度かそれ以下の期待度でしかなかった。

反対に、将来なってほしいと期待されることが少なかった項目をみると、最下位が「一流大学を出て、望み通りの職業につける人」の0.9%で、母親の世代では学歴主義的な出世を望む者は皆無に近いといえる。続いて望

まれる割合が低かったのは、「人の上に立つリーダーシップがある人」が3.1%、「社会に奉仕できる人」が5.9%、「国際的に活躍できる人」が6.2%、「世間の常識より、自分らしい個性的な生き方をしている人」が7.1%などであった。母親は子どもの出世や社会的自己実現、個性の発揮よりも、心身や人間関係の健康などの伝統的で素朴なことを望んでいることがわかる。

1997年調査と比較してみると、ベスト3のうち第3位の「善悪をわきまえ、他人に迷惑をかけない人」が13.6ポイントも増加している。これに対して期待度が減ったのは、「自分がしたいことや夢を持ち続けて生きている人」(10.2ポイント減少)、「自分の意思を主張できて、粘り強く物事に取り組める人」(5.2ポイント減少)、「誠実で責任感の強い人」(4.4ポイント減少)などである。社会的協調への期待が強まり、反対に夢や意思、誠実などが期待されなくなっている。

■図4-1 将来どのような人になってほしいか(経年比較)



注) 5つまで選択。

◆◆女子には個性的な生き方を期待

続いて図4-2は、将来どのような人になってほしいかを子どもの性別でみたものである(性別に大きな差があった項目のみを示している)。

母親たちは、女子に対しては男子よりも高い割合で、「まわりの人に思いやりがある、心やさしい人」(男子77.3%<女子86.6%)、「社交性・協調性がある、だれとでも仲よくなれる人」(男子24.8%<女子36.9%)、「よきパートナーと出会い、幸せな家庭を築く人」(男子24.3%<女子36.7%)など周囲との良好な人間関係を望んでいる。しかし同時に、「自分がしたいことや夢を持ち続けて生きている人」(男子31.6%<女子40.2%)という個性的な生き方についても、男子よりも女子に対して望んでいる割合が高い。反対に、女子よりも男子に対して望む割合が高い項目は、「誠実で責任感の強い人」(男子30.6%>女子19.3%)と「仕事も家庭生活も大事にする人」(男子33.6%>女子15.9%)であった。男子に対して、いわゆる仕事人間にならないように希望している様子がわかる。

◆◆社会奉仕や社会貢献を望む母親は 高学歴を期待

将来どのような人になってほしいかという期待は、子どもへの学歴期待に強く影響する。図4-3は、子どもに期待する将来像別にどのような学歴を期待しているか(高学歴:大学、大学院。非高学歴:中学、高校、専門、短大)をみたものである。

この図は少々読みにくい図なので、最初に読み方を説明する。この図は、「一流大学を出て、望み通りの職業につける人」から「よきパートナーと出会い、幸せな家庭を築く人」までの質問で、それぞれの生き方を「期待する」母親たちが、子どもにどのような学歴を期待しているかを示している。したがって、図4-3はそれぞれの生き方を「期待する母親」の学歴期待が示してあり、「期待しない」母親たちの学歴期待は省いてある。

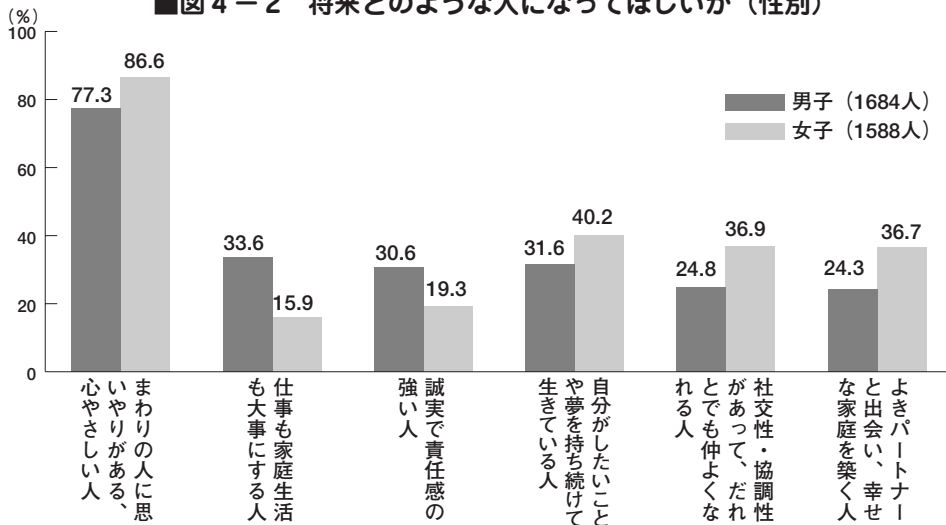
例えば、子どもが「国際的に活躍できる人」になることを期待する母親の74.0%が子どもに高学歴を期待し、16.7%が非高学歴を期待している。ただし、前述のように、この図では子どもが「国際的に活躍できる人」になることを期待しない母親の学歴期待は示していない。

分析を進める前に、もう一つ、説明しておきたいことがある。それは、図の中程に示してある「全体」である。「全体」とは、将来についての質問とは別に、回答者全体の学歴期待を示している。母親全体の傾向をみると、高学歴の取得を期待する母親が53.4%、非高学歴を期待する母親が34.0%、その他・無答不明の合計が12.6%であった(なお、母親の学歴期待の分析は後述する)。

それでは最初に、今みた「全体」よりも高学歴を志向する母親が多かった項目をみると、まず、当然のことだが、「一流大学を出て、望み通りの職業につける人」になることを望む母親の9割以上が子どもに高学歴を期待している。続いて、「国際的に活躍できる人」を望む母親のおよそ4分の3が高学歴を希望している。さらに、「人の上に立つリーダーシップがある人」「誠実で責任感の強い人」「社会に奉仕できる人」などを望む母親の6割以上が子どもに対して大学や大学院卒業を望んでいる。子どもに対して、社会奉仕や社会貢献を望む母親で、高学歴の期待が高くなっているといえる。

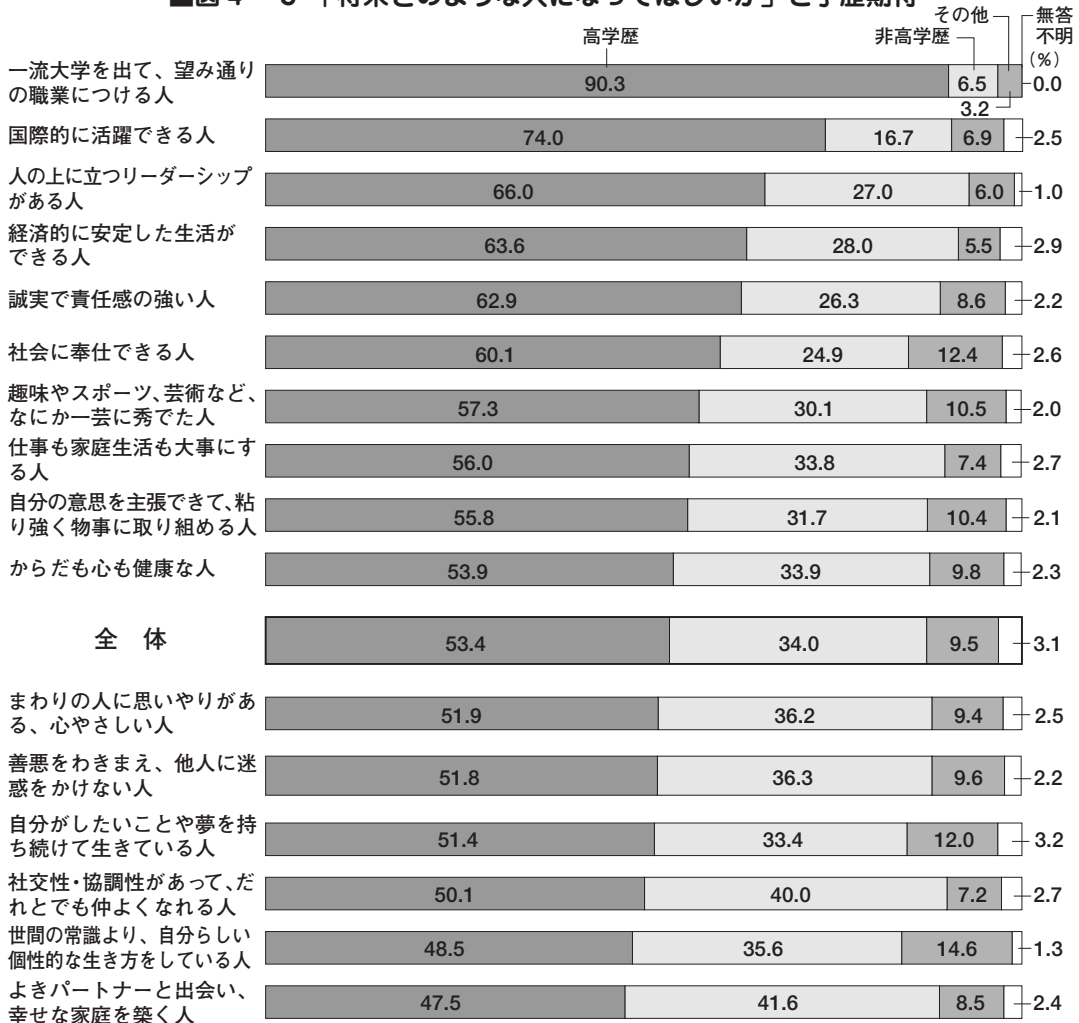
これに対して、「まわりの人に思いやりがある、心やさしい人」「善悪をわきまえ、他人に迷惑をかけない人」「社交性・協調性がある、だれとでも仲よくなれる人」「よきパートナーと出会い、幸せな家庭を築く人」などの周囲との良好な人間関係を望む母親では高学歴を期待する割合はおよそ5割にとどまる。また、「自分がしたいことや夢を持ち続けて生きている人」「世間の常識より、自分らしい個性的な生き方をしている人」といった、個性的な生き方を望む母親の間でも高学歴の期待はおよそ5割でしかない。

■図4-2 将来どのような人になってほしいか(性別)



注) 16項目中5つまで選択。

■図4-3 「将来どのような人になってほしいか」と学歴期待



注) 「全体」のサンプル数は3477人。それ以外のサンプル数は、「将来どのような人になってほしいか」の質問に対して、「無答不明」だった201人を除いた3276人。

◆◆子育ての方針ごとに 将来の期待が異なる

最後に、子どもが将来どのようなようになってほしいかを決定づけている要因の分析を行う。ここでは、規定要因として「子育ての方針」と子どもの将来への期待の関係を考察する。表4-1は、「ペアになっている子育て方針のどちらを選んだか」と「将来どのような人になってほしいか」の関係を示している。

この表も少々読みとりにくいので、最初に読み方を説明したい。例えば、表の一番下にある「A：わがママを言ったら、たたいてでもしつける」と「B：わがママを言ったら、分かるまで言葉でさとす」のペアの質問項目のうち、Bを選択した母親は68.0%が子どもに対して、「善悪をわきまえ、他人に迷惑をかけない人」になってほしいと期待している。これに対して、Aを選択した母親では先ほどよりも9.4ポイント高い77.4%が、子どもに対して、「善悪をわきまえ、他人に迷惑をかけない人」になることを期待している。

それでは検討に入る。まず、「まわりの人に思いやりがある、心やさしい人」に着目すると、「A：子どもの進路は、将来、子ども自身に任せるべきである」と考える母親は「B：子どもの進路は、親が責任をもって考えるべきである」と考える母親よりも「まわりの人に思いやりがある、心やさしい人」になってほしいと考える傾向が強い(83.2%対69.4%)。

同じく「まわりの人に思いやりがある、心やさしい人」については、「B：大学進学や学校名にはこだわらない」母親は、「A：世間で名の通った大学に通ってほしい」母親よりも(84.0%対72.4%)、そして「B：子どもは育つ環境によってどのような能力も伸ばせ

ると思う」母親は「A：子どもは生まれつき能力が決まっていると思う」母親よりも(82.9%対75.2%)、それぞれ「まわりの人に思いやりがある、心やさしい人」になってほしいと考える傾向がある。「子どもの進路は子どもに任せ」、「大学進学や学校名にはこだわらず」、「育つ環境によってどのような能力も伸ばせる」と可能性を信じている母親はそうでない母親よりも、子どもに対して“思いやりややさしさにもとづいた周囲との良好な人間関係”を望んでいる。

続いて、「善悪をわきまえ、他人に迷惑をかけない人」についてみてみよう。「善悪をわきまえ、他人に迷惑をかけない人」という期待は、他人との良好な関係という意味では共通しているが、「まわりの人に思いやりがある、心やさしい人」は思いやりややさしさにもとづく良好な人間関係への期待であり、「善悪をわきまえ、他人に迷惑をかけない人」は善悪判断にもとづいた周囲との良好な人間関係への期待である。

まず、「A：もしかしたら、子どもを十分に愛していないかもしれない」母親のうち76.1%が「善悪をわきまえ、他人に迷惑をかけない人」になることを大切にしたいと考えているのに対して、「B：子どもを十分に愛している自信がある」母親ではそうした割合は69.7%と低くなる。同じく、「B：わがママを言ったら、分かるまで言葉でさとす」母親は「A：わがママを言ったら、たたいてでもしつける」母親よりも善悪判断にもとづいた周囲との良好な人間関係への期待が低い(68.0%対77.4%)。これらから、子どもを愛している自信がなく、たたいてしつける母親は“善悪判断にもとづいた周囲との良好な人間関係”を期待する傾向があることがわかる。

■表4-1 将来どのような人になってほしいか(子育ての方針別)

(%)

①「まわりの人に思いやりがある、心やさしい人」を望む割合	A：子どもの進路は、将来、子ども自身に任せるべきである	83.2
	B：子どもの進路は、親が責任をもって考えるべきである	69.4
	A：世間で名の通った大学に通ってほしい	72.4
	B：大学進学や学校名にはこだわらない	84.0
	A：子どもは生まれつき能力が決まっていると思う	75.2
	B：子どもは育つ環境によってどのような能力も伸ばせると思う	82.9
②「善悪をわきまえ、他人に迷惑をかけない人」を望む割合	A：もしかしたら、子どもを十分に愛していないかもしれない	76.1
	B：子どもを十分に愛している自信がある	69.7
	A：わがママを言ったら、たたいてでもしつける	77.4
	B：わがママを言ったら、分かるまで言葉でさとす	68.0

注) ①「将来どのような人になってほしいと思いますか」は16項目中5つまで選択。表4-1では、①で6つ以上回答した人(201人)はサンプルから除いた。

2 希望する進学段階

「四年制大学まで」は49.7%、「大学院まで」が2.9%で合計すると全体の5割強、52.6%が四年制大学以上を期待している。性別では、女子のほうが高学歴を期待する割合が低い。6年前と比べると母親たちの高学歴期待はおよそ1割も低くなった。

小学校受験については、「させない」が81.7%、「させる」はわずか1.8%、「まだ決めていない」が15.8%であった。

◆◆母親の高学歴志向が弱まっている

まず、表4-2で2003年調査の結果をみると、母親の学歴期待は「中学校まで」0.2%、「高校まで」14.2%、「専門学校・各種学校まで」11.4%で、これらを合計すると全体の4分の1である25.8%が高等教育の学歴を期待していない。これに対して、「四年制大学まで」49.7%、「大学院まで」2.9%と、高学歴を期待している割合は全体の5割強の52.6%であった（この他に、「短期大学まで」8.8%、「その他」9.4%）。

性別にみると、男子の母親のおよそ6割強（63.5%）が高学歴（「四年制大学まで」と「大学院まで」の合計とした）の取得を期待しているのに対し、女子の母親で高学歴の取得を期待しているのは41.0%であった。女子の場合、「短期大学まで」17.8%を加えても58.8%にとどまる。子どもの性別で学歴期待に大きな差があることがわかる。

次に、1997年調査と比較すると、高学歴を期待する割合は、1997年調査の60.1%から2003年調査の52.6%へと7.5ポイントも減少した。なお、2002年に実施した調査（『第2回

子育て生活基本調査・小中学生版』〈2003年、ベネッセ未来教育センター〉）でも、すでに、小中学生の母親も高学歴志向が弱まっていることがわかっている。今回の調査結果では、園児の母親の間でも、高学歴志向が弱まっていることがわかった。

性別では、男子で高学歴志向の弱まりの程度が強く、73.6%から63.5%へと10.1ポイントの減少になっている。

◆◆小学校受験を考慮中が15.8%

小学校受験については、表4-3にあるように、「させない」が81.7%、「させる」が1.8%、「まだ決めていない」が15.8%であった。「まだ決めていない」に着目して学年別変化をみると、年少では22.6%の母親が「まだ決めていない」と答えているが、年長では11.0%と11.6ポイントの減少となっている。しかし、「させる」という回答はほとんど変化がなく、増加するのは「させない」という回答の値であった。これらから、一度は受験を考慮した母親の大半が、受験をさせないという結論に達しているものと思われる。

■表4-2 希望する進学段階(経年比較、性別)

(%)

	1997年			2003年		
	全体 (2478人)	男子 (1259人)	女子 (1213人)	全体 (3477人)	男子 (1790人)	女子 (1682人)
中学校まで	0.5	0.4	0.7	0.2	0.2	0.2
高校まで	10.7	9.1	12.3	14.2	13.7	14.7
専門学校・各種学校まで	8.9	6.7	11.2	11.4	10.3	12.7
短期大学まで	8.4	0.2	16.7	8.8	0.3	17.8
四年制大学まで	57.3	69.6	44.4	49.7	59.5	39.3
大学院まで	2.8	4.0	1.6	2.9	4.0	1.7
その他	7.1	6.2	8.0	9.4	9.1	9.8
無答不明	4.4	3.8	5.0	3.3	2.8	3.9

■表4-3 小学校受験の予定(全体、学年別)

(%)

	全体 (3477人)	学年別		
		年少 (752人)	年中 (1332人)	年長 (1370人)
させる	1.8	2.1	1.5	1.9
させない	81.7	74.5	81.2	86.4
まだ決めていない	15.8	22.6	16.7	11.0
無答不明	0.7	0.8	0.6	0.7

第2節

塾・習い事・通信教育

1 塾・習い事・通信教育の利用率

母親が専業主婦だと子どもを塾や習い事に通わせる傾向が強い。学年別では年長が、幼保別では幼稚園の母親で通わせる割合が高い。この結果、幼稚園の年長がもっとも利用率が高く、4分の3以上の園児が利用している。

◆◆首都圏の園児の[※]園外教育機関利用率は6割強

最初に、図4-4をみると、今回の調査では58.8%の園児が塾や習い事、通信教育などの園外教育機関を利用しており、1997年調査の61.7%よりも2.9ポイントの減少である。続いて、表4-4をみると、地域別では、上述のように首都圏では58.8%であるのに対して、地方都市は首都圏よりわずかに少なく57.9%、郡部は大幅に少なく31.3%であった。郡部の園児たちの園外教育機関利用率は、都市部と比べておおよそ半分になっている。なお、年長だけをみると、地方都市が首都圏より3.1ポイント高く70.9%と7割を超える利用率になっている。

※幼稚園・保育園以外で塾・習い事・通信教育をやっている割合。

◆◆年少で4割強、年中で6割弱、年長で7割弱が利用

次に、学年別にみると、年少が41.9%、年中が59.1%、年長が67.8%と学年ごとに大きく利用率が上昇する(表4-5)。(ちなみに、『第2回子育て生活基本調査・小中学生版』〈2003年、ベネッセ未来教育センター〉でも、首都圏の子どもの習い事利用率は学年が上がるごとに上昇する傾向がみられ、低学年では小1生が88.7%、小2生が89.3%、そして小

3生で92.8%という結果だった。)

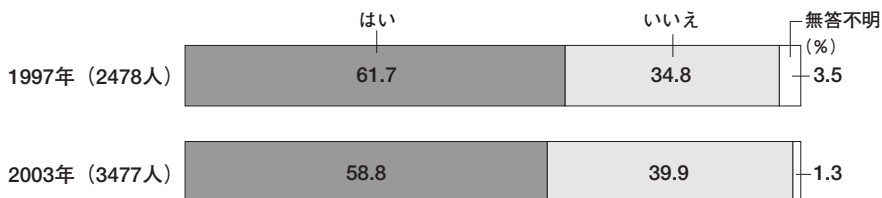
同じく表4-5で、母親就労状況別の利用率では、パートが50.2%、常勤が48.2%に対して、専業主婦では10ポイント以上高い67.4%であった。また、幼保別では保育園が44.2%であるのに対して、幼稚園は67.0%であった。さらに、それぞれの学年を幼保別にみると、年少では幼稚園の53.2%に対して保育園の28.9%、年中では幼稚園63.7%、保育園49.9%、年長では幼稚園76.1%、保育園50.5%となっていて、幼保間の差は年長では25ポイント強の大差になっている(表省略)。

◆◆年長では5割弱が複数を利用

塾、習い事、通信教育を複数習っている子どもは多い。表4-6にあるように、2か所以上習っている割合は、全体で31.5%と3割を超えている。複数か所利用率は、幼保間で大きな差があり、幼稚園の39.1%に対して保育園ではおおよそ半分の17.9%にとどまる。

学年別には、幼稚園では2か所以上利用している割合は年少26.3%、年中35.8%、年長47.8%と学年が上がるにつれておおよそ10ポイントずつ増加する。これに対して、保育園では年少10.1%、年中19.3%、年長22.1%という増加にとどまる。幼保の差は年長で25.7ポイントの大差になる。

■図4-4 習い事の割合(経年比較)



■表4-4 習い事の割合(地域別、学年別)

(%)

	全体	学年別		
		年少	年中	年長
首都圏 (3477人)	58.8	41.9	59.1	67.8
地方都市 (463人)	57.9	43.4	60.1	70.9
郡部 (332人)	31.3	17.3	26.5	45.4

■表4-5 習い事の割合(学年別、母親就労状況別、幼保別)

(%)

	学年別			母親就労状況別			幼保別	
	年少 (752人)	年中 (1332人)	年長 (1370人)	専業主婦 (1709人)	パート (950人)	常勤 (631人)	幼稚園 (2221人)	保育園 (1256人)
はい	41.9	59.1	67.8	67.4	50.2	48.2	67.0	44.2
いいえ	56.4	39.7	31.1	31.9	48.2	50.2	31.8	54.3
無答不明	1.7	1.2	1.1	0.7	1.6	1.6	1.2	1.5

■表4-6 何か所の習い事を利用しているか(全体、幼保別、幼保学年別)

(%)

	全体	幼保別		幼稚園			保育園		
		幼稚園	保育園	年少	年中	年長	年少	年中	年長
なし (0か所)	39.9	31.8	54.3	45.5	35.1	22.8	68.9	49.0	48.4
1か所	27.3	27.9	26.4	26.9	27.8	28.3	18.9	30.6	28.4
2か所以上	31.5	39.1	17.9	26.3	35.8	47.8	10.1	19.3	22.1
2か所	18.5	22.1	12.1	16.9	21.4	24.9	8.3	12.4	14.4
3か所	8.9	11.4	4.4	6.0	9.8	15.2	0.9	5.6	5.9
4か所	3.0	4.1	1.1	3.0	3.5	5.2	0.9	1.3	1.1
5か所	0.9	1.3	0.1	0.2	0.9	2.2	—	—	0.2
6か所	0.2	1.2	0.2	—	0.2	0.3	—	—	0.5
7か所	0.0	0.0	—	0.2	—	—	—	—	—
無答不明	1.3	1.2	1.5	1.2	1.2	1.1	2.3	1.1	1.1

注) サンプル数は3477人。

2 現在している塾・習い事・通信教育

6年間で、芸術系の習い事が減少した。また、「英会話などの語学教室や個人レッスン」がおよそ7ポイント増加して13.0%になった。習い事をしている割合は学歴期待との相関が非常に強く、学歴期待が高い母親の子どものほうが学歴期待が低い母親の子どもよりも利用率が高い。開始時期は、スポーツ系と芸術系の学習機関では4歳が開始年齢のピーク、家庭内で行う通信教育や教材・教育セットの開始は早く、0歳または1歳がピークである。

◆芸術系が減少

最初に、表4-7で2003年調査の結果をみると、もっとも多く利用されているのが「定期的に教材が届く通信教育」の23.1%、その次に多く利用されているのが「スイミングスクール」の22.4%であった。この2つが他を大きく引き離して多かった。そして、第3位が今回急激に増加した「英会話などの語学教室や個人レッスン」の13.0%、第4位が「スポーツクラブ・体操教室」の11.9%であった。これ以外の利用率は10%を切っていた。

同じ表で1997年調査と比較すると、この6年間で園児が利用する塾や習い事の内容が大きく変化した。

まず、減少したのは芸術系の3つの習い事である。「楽器」(10.6%→7.4%)、「幼児向けの音楽教室」(7.8%→4.7%)、「お絵かきや造形教室」(4.3%→2.6%)がいずれも減少し、3つを合計すると22.7%から14.7%へと8.0ポイントの減少になっている。また、学習系も「小学校受験のための塾や家庭教師」「計算・書きとりなどのプリント教材教室」「定期的に教材が届く通信教育」「一度に購入する教材・教育セット」の合計が38.7%から31.4%へと7.3ポイント減少している(減少分のほとんどは「通信教育」によるもの[28.9%→

23.1%]だが、その減少は調査方法の変更による影響である可能性がある)。

スポーツ系(「スイミングスクール」「スポーツクラブ・体操教室」「地域のスポーツチーム」)の合計は38.6%から37.4%へとほとんど変化がなかった。

これら以外で、この6年間で大きく変化したのは、「英会話などの語学教室や個人レッスン」で、6.1%から13.0%へと6.9ポイント増加している。

また、図4-5で、学歴期待別に習い事をしている割合をみると、まず、高学歴を期待する母親の子どものほうが習い事をしている割合が高く、非高学歴の49.3%に対して、高学歴では66.2%と約17ポイントの大差になっている。

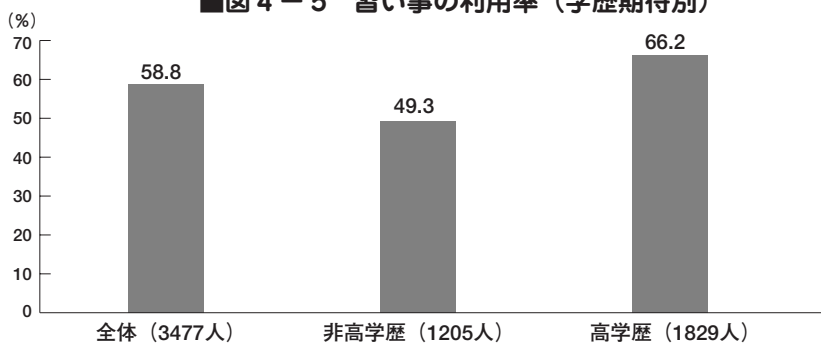
また、個々の習い事で大きな差があったのは、「スイミングスクール」「スポーツクラブ・体操教室」「地域のスポーツチーム」「楽器」「英会話などの語学教室や個人レッスン」「計算・書きとりなどのプリント教材教室」「定期的に教材が届く通信教育」などであった(図4-6)。ほとんどの習い事で高学歴を期待する層のほうが習い事の利用率が高く、習い事をしている割合は学歴期待との相関が非常に強いといえる。

■表4-7 習い事の内容(経年比較)

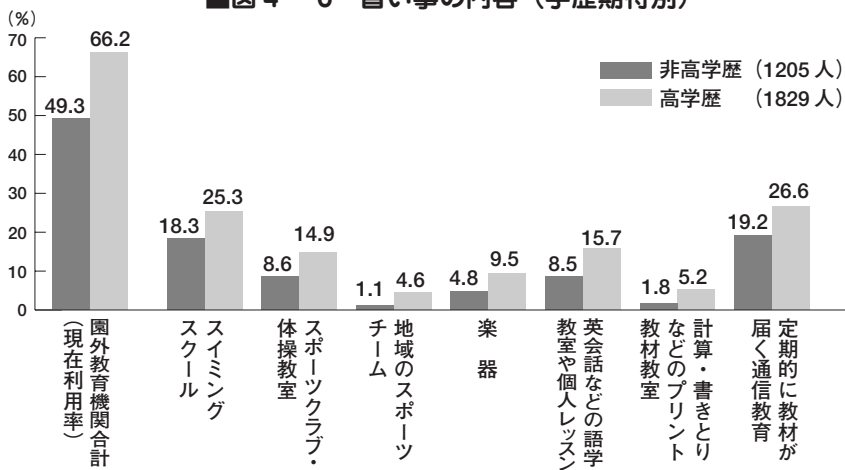
	1997年 (2478人)		2003年 (3477人)	
	1997年	2003年	1997年	2003年
スイミングスクール スポーツクラブ・体操教室 地域のスポーツチーム	23.6 13.5 1.5	22.4 11.9 3.1	スポーツ系合計 38.6	37.4
バレエ・リトミック	5.3	5.0		
楽器 幼児向けの音楽教室 お絵かきや造形教室	10.6 7.8 4.3	7.4 4.7 2.6	芸術系合計 22.7	14.7
習字 そろばん 児童館など公共施設での自治体主催の教室・サークル 受験が目的ではない幼児教室やプレイルーム 英会話などの語学教室や個人レッスン	1.7 0.2 1.7 4.0 6.1	1.4 0.1 2.1 2.5 13.0		
小学校受験のための塾や家庭教師 計算・書きとりなどのプリント教材教室 定期的に教材が届く通信教育 一度に購入する教材・教育セット	1.5 3.8 28.9 4.5	0.5 3.7 23.1 4.1	学習系の合計 38.7	31.4
その他	3.8	1.1		

注) 複数回答。

■図4-5 習い事の利用率(学歴期待別)



■図4-6 習い事の内容(学歴期待別)



◆◆スポーツ系と芸術系は4歳が 開始年齢のピーク

最後に、表4-8で習い事別に利用開始時期をみてみよう。低い年齢から始める割合が高いものは、「一度に購入する教材・教育セット」で、0歳から開始した割合が29.6%となっている。続いて、「定期的に教材が届く通信教育」で、1歳から開始する割合が30.5%である。家庭で教材を使って行う学習は開始年齢が早い傾向がうかがえる。

その他で開始年齢が低いのは、「児童館など公共施設での自治体主催の教室・サークル」「受験が目的ではない幼児教室やプレイ

ルーム」がそれぞれ2歳と3歳で開始年齢のピークを迎えている。

これに対して、開始年齢が遅いのは「習字」「そろばん」「小学校受験のための塾や家庭教師」「計算・書きとりなどのプリント教材教室」で、開始年齢のピークは5歳になっている。学習系はタイプによって開始時期が分散し、家庭内で行う通信教育や教材・教育セットの開始は早く、受験や小学校の勉強とかかわる習い事の開始は遅い。

スポーツ系と芸術系の習い事では、4歳が開始年齢のピークになっているものが多い。

■表4-8 習い事の開始時期

(%)

	人数	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	無答不明
スイミングスクール	780	3.1	4.7	6.3	26.9	32.1	20.3	3.6	3.1
スポーツクラブ・体操教室	415	0.2	1.0	9.4	19.3	43.6	21.7	3.9	1.0
地域のスポーツチーム	107	—	0.9	0.9	2.8	49.5	34.6	6.5	4.7
バレエ・リトミック	174	—	2.3	10.3	18.4	40.2	22.4	1.7	4.6
楽 器	258	—	—	0.4	17.4	49.6	26.0	3.9	2.7
幼児向けの音楽教室	163	—	1.8	14.1	26.4	38.0	17.8	0.6	1.2
お絵かきや造形教室	90	—	—	3.3	17.8	43.3	31.1	2.2	2.2
習 字	48	—	—	—	2.1	20.8	60.4	12.5	4.2
そろばん	4	—	—	—	25.0	—	75.0	—	—
児童館など公共施設での自治体主催の教室・サークル	72	15.3	9.7	29.2	16.7	15.3	12.5	—	1.4
受験が目的ではない幼児教室やプレイルーム	86	3.5	11.6	26.7	30.2	19.8	8.1	—	—
小学校受験のための塾や家庭教師	19	—	—	—	10.5	31.6	57.9	—	—
英会話などの語学教室や個人レッスン	451	—	2.2	14.9	26.2	36.6	14.6	3.3	2.2
計算・書きとりなどのプリント教材教室	128	—	0.8	4.7	18.0	29.7	38.3	3.1	5.5
定期的に教材が届く通信教育	802	5.9	30.5	24.9	17.8	11.0	7.0	0.6	2.2
一度に購入する教材・教育セット	142	29.6	19.7	15.5	21.8	6.3	4.9	0.7	1.4
その他	38	—	—	7.9	21.1	28.9	26.3	2.6	13.2

3 教育費

園外教育機関への教育費の支出は10,000円未満が全体のおよそ3分の2。幼保別では、幼稚園は保育園よりも園外教育機関への教育費の支出が多い。

図4-7で、2003年調査の結果からみると、「2,500円未満」が11.5%、「2,500円～5,000円未満」が13.3%で、4分の1にあたる24.8%が5,000円未満であった。そして「5,000円～10,000円未満」が41.0%と4割を超えており、これらを合わせると10,000円未満が全体の3分の2の65.8%を占める。これに対して、10,000円を超える“高額”支出者は33.3%だけであった。

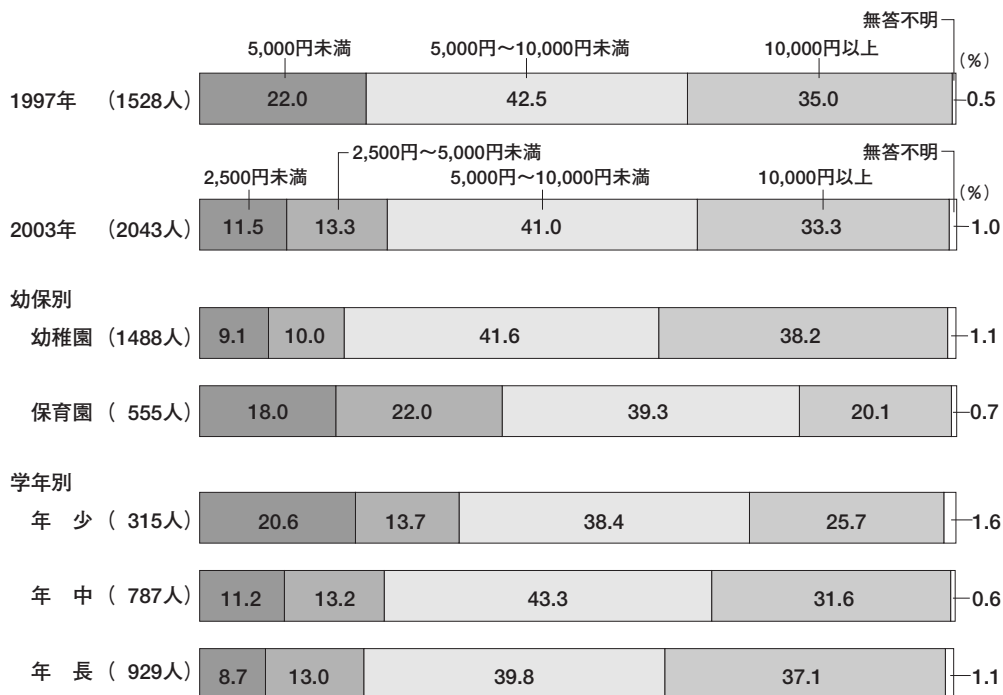
6年前との比較では、習い事への教育費の支出はわずかに下がっている。「5,000円未満」が1997年度の22.0%から2003年度の24.8%へとやや増加し、反対に「10,000円以上」の合計が35.0%から33.3%へとやや減少している。

子どもの属性別に、教育費に大きな差異が

みられた。同じく図4-7で、子どもの学年別にみると、教育費の支出は年齢が上がるにつれて急激に高額になっていく。「2,500円未満」をみると、年少で20.6%であったのが年中以11.2%、年長では8.7%と減少する。反対に「10,000円以上」が年少の25.7%から年中以31.6%、年長の37.1%へと増加する。

同じ図で、幼保別には、幼稚園児は保育園児よりも園外教育機関への教育費の支出が高く、「2,500円未満」が幼稚園では9.1%に対して保育園では18.0%、逆に「10,000円以上」の高額支出者は幼稚園が38.2%もいるのに対して、保育園では18.1ポイントも低い20.1%にとどまっている。

■図4-7 教育費（経年比較、幼保別、学年別）



注) 習い事をさせている母親を母数にしている。

第3節

小学校に期待すること

幼児の母親は学校に対して学力や能力の育成をあまり期待していない。母親が小学校に対して望む指導や取り組みの上位にくるものは、こころ、道徳、規則の指導、あるいは内面的成長の指導であった。反対に、望む割合が少ないのは、学力やさまざまな能力に関する項目である。具体的には受験学力、コンピュータ、芸術面、英会話、スポーツ能力・体力向上などへの要望が低かった。

小学校に望む指導や取り組みについてたずねた結果が図4-8である。4段階の選択肢のうち、「とても望む」と答えた割合が多かった第1位は、子どものこころの問題である「思いやりや道徳心を育てること」の73.5%であった。続いて、第2位は内面的成長についての指導である「子どもの興味・関心をのばすこと」の70.9%、そして第3位はわずかな差で道徳面についての指導である「あいさつやお礼をきちんとと言えるよう指導すること」の70.6%であった。第4位も道徳面に関する指導の「ルールやきまりを守るよう指導すること」の57.8%であった。第5位は再び小差で「保護者が気軽に質問したり相談したりできること」の57.4%であった。このような取り組みを望む背景として、母親は学校とのコミュニケーションをほしがっているということがあげられるのではないだろうか。

反対に、要望の低かった指導や取り組みの第1位は「将来の受験に役立つ学力を身につけること」が9.6%であった。第2位以下は「コンピュータを使う力をつけること」18.9%、「音楽や美術など芸術面の才能を伸ばすこと」19.0%、「英会話の力をつけること」26.5%、

「スポーツの能力や体力を向上させること」31.9%であった。いずれも学力や能力を高めることであり、母親は学校に対しては学力や能力の育成はあまり望んでいないようだ。

最後に子どもの出生順位別に母親が小学校に望む取り組みをみてみよう。表4-9にあるように、第1子と第2子以降で小学校に望むことが異なっている。第1子のほうが望む割合が多いのは道徳や興味・関心、芸術の才能などで、「思いやりや道徳心を育てること」(第1子75.0%、第2子以降71.9%)、「子どもの興味・関心を伸ばすこと」(同75.1%、66.3%)、「音楽や美術など芸術面の才能を伸ばすこと」(同21.4%、16.3%)となっている。さらに、「英会話の力をつけること」(同30.6%、22.1%)、「保護者が気軽に質問したり相談したりできること」(同63.8%、50.7%)も第1子の母親のほうが多い。

これに対して、第2子以降のほうが多かったのは、「教科の基礎的な学力を身につけること」(同49.2%、60.0%)、「学習習慣を身につけること」(同34.7%、44.2%)の2項目であり、第2子以降に対しては学習に関する指導を望む割合が高くなる。

